

秋田 喜代美 (東京大学 Cedep センター長・教授)

本プロジェクトには、3点の特徴があります。第一に、3,000組近くのご家族に対して両親それぞれの子育てへの関わりを調べることで子育て最初期の夫婦のあり方を明らかにしていくこと、第二に、生まれ月を1か月ごとにほぼ同数のサンプルにしたので、月齢別に0～1歳児期の育ちと子育ての悩みの変化が見えてきていること、第三に、子どもの就園の有無や出生順位、保護者の就労の有無や地域等、できるだけ多様な方々の中での共通性や相違を継続的に調べられる調査となっていることです。

本調査は子どもと保護者の家族システム全体を縦断的に調査分析していく予定です。子どもが0歳時点から、その後回答者がどのように家族形成や子育てをしていくのかも今後の調査で次第に明らかになっていきます。私どもの調査が、ご協力いただくご家族とともに、日本の子育ての今を最初期から捉え、子育てする社会にとってよりよいあり方を皆で考える大事なエビデンスになっていけば、うれしい限りです。

遠藤 利彦 (東京大学 Cedep 副センター長・教授)

妊娠・出産を肯定的に受け止めている夫婦が大半ですが、うれしくても、出産後における現実の子どもの世話には、特に母親が相当の負担感を抱えているようです。そうした状況で、夫婦間において、子育てや家事などをいかに助け合うかが大きな意味を有していることが見てとれる結果になっています。また0～1歳児期においては、まだ生活リズムの個人差がかなり大きいようです。養育者が子どもの生活環境にしっかりと規則性や一貫性をもたせる中で、子どもが徐々に生活リズムを確立していけるように心がけたいものです。メディアの利用に関していうと、スマートフォンの使用が少ないという結果は、少しホッとできるものかと思えます。0～1歳児期での子どもの心の発達には、母親や父親といった周囲の他者とどれだけ双方向的なやりとりができるかということと密接に関連しています。散歩しながら子どもに様々な刺激にふれさせる中で、また絵本を読み聞かせしながらそのストーリーや絵に注意を促す中で、子どもとの表情や言葉を介した豊かな相互作用を楽しみたいものです。

野澤 祥子 (東京大学 Cedep ・准教授)

本プロジェクトでは、0～1歳児期の親の生活や意識について興味深い知見が得られました。父親の子育てへのかかわりを見てみると、平日の子育て時間が2時間未満の父親が約7割を占め、母親との不均衡は依然として大きいことが明らかとなりました。しかし、休日の子育て時間にはばらつきがあり、4割程度の父親は6時間以上子育てにかかわっています。日々、乳児と向き合う時間が長い母親の子育てを支援するのは、無論、重要です。一方で、父親が子育てで不安を抱える場合があることも踏まえつつ、乳児期からの父親の子育てを支援するあり方を検討することも必要です。

また、子育てを取り巻く社会についての親の意識では、特に「子育てと仕事を両立しやすい社会である」とへの評価が低かったです。子育てしやすい社会にするために、多くの親が「子育て・教育にかかる費用の軽減」のみならず、「子育てと仕事の両立支援の充実」や「働き方の見直しや柔軟化」を挙げています。少子化が深刻化する日本において、ワーク・ライフ・バランスを実現できる社会の重要性が、親の意識から改めて浮き彫りになったといえます。